国際シンポジウム
『樹について考える』シンポジウム
大阪、国立民族学博物館　　2013 年 2 月 10 日（日）

講演要旨
【文献学】
「死語の方言と系統樹モデル―中世イラン語東方言を例に」

吉田　豊
（京都大学）

R. M. W. ディクソンは『言語の興亡』（岩波 1997: 63）において次のように述べている：

「我々には長い歴史的記録が備わったシナリオはほんの少し，つまり，ギリシア語，インド＝アーリア語，ヘブライ語とエジプト語くらいしか与えられておらず，・・・しかもこれとても・・・ 3000 年かせいぜい 4000 年しかカバーしていないのだ．」

これは言語の変化を文献でたどる可能性に関して，一般の言語学者が持っている一種の常識，共通認識をあらわしていると言える．ここに大きな誤解があるわけではないが，イラン語派はインド＝イラン語派とひとくくりに扱われ，常にインド側の陰に隠れて歴史言語学の議論の中で等閑視されてきた．事実は，イラン側はインド側に匹敵する豊富な文献の記録が残されているだけでなく，現在なおアナトリアから中国領の中央アジアまで広い範囲にわたって，多数の同系言語が話されているのである．つまりイラン系の言語は，歴史言語学の分野で，インド側やイタリック語派に勝るとも劣らぬ好条件を備えた言語群と言えるのである．

本発表は，従来あまり注目されることのなかった，イスラム化以前のイラン系の文献言語（ソグド語などの中世東イラン諸言語）の研究から得られるいくつかの知見を，系統樹モデルとの関連で提示する．扱う予定のテーマは以下の通りである．

1）一つの文献言語の中の言語のバリエーションを時代差と見るか方言差と見るか（方言分岐の有様をトレースする）
2）shared inheritance と shared innovation が隣接する言語と言語の変種でどのように現れているか：系統樹モデルが適用しにくいパターン
3）東イラン語と西イラン語の分岐：分岐を特徴付ける音韻変化と分岐の時代
4）分岐後の言語の unity をどのように特徴付けるか：基礎語彙は有効か？